

JA実践事例紹介

地域に開かれたJA女性組織 (前編)

静岡県JAしみず 「1地域1協同活動」と女性部支部活動

小川理恵

一般社団法人日本協同組合連携機構 基礎研究部長・主席研究員

JA女性組織は、70年を超える歴史のなかで、自給運動や産直活動、助けあい活動等を展開し、地域およびJAになくてはならない存在となり得た。一方で、高齢化と新規加入の停滞により部員減が進んでいる。地域に開かれた組織づくりや、地域住民とともに展開する新たな活動が求められている。JA女性組織の現状と活性化に向けた施策について、2JAの実践から探った。

前編では、JAしみずの支店を軸とした女性部支部活動、および本部活動を紹介する。



女性部リーダー・事務局研修会 各支部活動報告会



袖師支部が作成した卒入学祝のプランターでは、多くの子どもと保護者が記念撮影をする様子がみられた

1 はじめに

J A女性組織は、70年を超える歴史のなかで、食と農を基軸に、時代や地域ごとの課題や要望に寄り添った活動を広く展開してきた。それらのなかには、ファーマーズマーケット（農産物直売所）拡大の基礎となった地産地消活動や、J Aが高齢者福祉を事業化する際の土台となった助けあい活動なども含まれ、農協事業の新しい展開の基礎活動としての機能も持ち合わせている。J A女性組織は、女性自身の自己実現や生き甲斐づくりの範囲を超え、地域やJ Aにとってもなくてはならない存在になり得ているといえる。

いっぽうで、メンバー数をみると、高齢化と新規加入者の停滞を主因として、1959年の344万人をピークに減少の一途を辿り、2024年現在では41万人にまでその数を減らしている。また活動のマンネリ化も課題となるなど、J A女性組織は、全体的・長期的趨勢として縮小・停滞傾向にある。事務局についても、人員不足から、職員の大半が他業務との兼務となり、業務量的に当該事務局業務が副次的なものとならざるを得ない状況にある。

そうした背景に鑑みると、意義あるJ A女性組織活動を未来へつなぐためには、何か手を打つ必要性が一層高まっているといえる。特に、喫緊の課題であるメンバーの減少や活動のマンネリ化を踏まえると、地域との関係性をより深めた、開かれた組織づくりや、地域住民とともに築き上げる新たな活動の展開が求められるのではないか。そこで本稿では、そうした課題を意識しながら、J A女性組織の活性化に向けて取り組みを進める2つの実例を、前後編の2回に分けて紹介することとしたい。

2 J Aしみず「1地域1協同活動」と女性部

静岡市清水区を事業エリアとするJ Aしみずは、四季を通して温暖な気候の恵みを活かし、柑橘を中心とした果物類、地域を代表するブランド「折戸なす」などの野菜類、お茶、米、花卉など、多彩な農産物を生産・販売している。

管内には、海辺、山間部、平地がもれなく含まれるが、街なかでは、J Aは協同組合としてよりも、一般の金融機関と同等にみられる傾向が強く、地域差が大きいことが課題である。そこで同J Aでは、管内に11ある基幹支店が中心となり、「1地域1協同活動」（下線筆者）と独自に銘打ち、地域に密着した活動を幅広く展開している。「1支店」ではなく「1地域」としているのは、それぞれの地域性を大切にしながら、協同組合としての存在意義を、管内のすべての地域で分かち合おうとの思いが込められているからだ。そして、そうしたJ Aの方向性と並行して、J A女性部も、地域全体を視野に入れた彩り豊かな活動に取り組んでいる。

J Aしみず女性部には、令和6年7月現在で631名の女性が所属している。

管内を11の支部に分け、全体を統括する本部活動と地域性を活かした支部活動の両面で、活動に深みを持たせている。

女性部の総会資料には、活動項目・実施月日・内容・参加人数などが詳細に記された、本部と各支部それぞれの「活動報告書」が掲載されている。活動項目には「地域活動」の欄が設けられており、前述の「1地域1協同活動」をはじめとして、J A女性部が地域を舞台に活躍の場を広げていることが分かる。

そこで次節では、J Aしみず女性部における、地域を広く巻き込んだ支部活動の実例とその展開プロセスを紹介することとしたい。

③ 地域住民も支店職員もみんなが参加 袖師支部「川柳大会」

袖師支部の川柳大会は、コロナ禍真ただ中の令和2年度、会場に集まらず在宅でもできる活動を思案していた際に、家庭雑誌『家の光』の連載「川柳道場」からヒントを得た当時の支部長が「部員全員で川柳を作り、見せ合ったら面白いのではないかと提案したことから始まった。袖師支部は部員が31名と全支部のなかでは一番規模が小さい。しかし、だからこそ全員参加を意識した活動を目指しており、俳句と違い季語が不要な川柳は、話し言葉で自由に作れることから、苦手意識を持つ人でも気楽に参加できるだろう、との思いから実現したものである。

取り組み1年目の令和2年度は、すべての部員が参加することを目標とし、1人1句以上の川柳を作ってJ A支店に展示した。2年目の令和3年度には、少しレベルを上げて、「お題あり」と「お題なし」の2部門に分けて川柳を募集し、「よく言ってくれましたで賞」「女ごころですね〜賞」などキャッチーなネーミングの賞を設けて、女性部内で投票を行い、大いに盛り上がった。

地域を意識した活動へと変化したのは3年目の令和4年度である。コロナ禍が収まりつつあるなか、女性部の活動を地域の人々にもっと知ってもらい、女性部が地域とJ Aの橋渡しになろう、という目標が再燃したことが背景にあった。

そこで、女性部員だけでなく、職員やJ Aの利用者も参加できる、新たな川柳大会の形を模索した。まずは、多くの人に川柳を作ってもらおうと、店内に川柳の募集案内を掲示し、応募用紙も準備した。窓口では、職員が来店客に案内を手渡しするとともに、積極的に参加を呼び掛



応募作品は『家の光』「川柳道場」に投稿。支店で人気を集めた作品と「川柳道場」で入選した作品が異なることも多く、その違いも興味深かったという

けてもらった。またJAの職員には、女性部事務局が直接声を掛けて、参加を促した。

次に、作品の募集だけでなく、審査にも多くの人に参加してもらえる形を考えた。そこで、支店ロビーに全作品を掲示したうえで、投票用紙と投票箱を設置し、来店時に「これだ」と思う作品に1票を投じてもらうこととした。さらに、入賞した川柳に投票した人には、抽選でJAのギフトセットをプレゼントする、という投票へのモチベーションを高める工夫も施し、広くPRした。

投票の結果、上位6句を「入賞」とし、入賞作品は、女性部習字サークルのメンバーが美しい字で半紙に書き、そこに女性部の折り紙活動で作成した花を添えて、あらためて支店に展示した。川柳の募集・全作品展示・投票・入賞作品発表と、約4カ月の間、支店ロビーには川柳関連の展示が続き、それを楽しみに来店する人が増えた。なかには椅子に腰かけてじっくりと鑑賞する人や、「次は何を展示するの?」と声をかけてくれる人もいたという。また、結果だけでなく、そこに至るまでの作業風景を写真に撮り、あわせて掲示することで、女性部活動の詳細が伝わり、「女性部ってこんなこともやっていてすごいね!」と驚きをもって受け止める来店者も増えた。

令和4年度の川柳大会への参加状況をみると、作品の応募は、女性部が25名、職員が12名、地域住民(来店者)が11名で、合計48名から124句が集まった。「お題あり」「お題なし」の2部門で、それぞれ3作品を入選とし、入選作品に投票した来店者のなかから抽選で各3名に景品をプレゼントすることを事前に広く案内したことで、投票数は70票に上った。

令和5年度も令和4年度と同様に実施し、多くの地域住民が川柳大会に参加してくれた。川柳作りだけでなく、投票にも参加でき、さらに投票を促すアイデアも盛り込んだことで、女性部の川柳大会は、地域に開かれた活動へと昇華した。そして川柳大会をきっかけに、JAを身近に感じるようになったり、より多く支店に足を運ぶようになったりした利用者が増えたことは言うまでもない。

4 情報共有がよい刺激に～支部の活動報告会

JAしみず女性部では、こうした優れた支部活動の横展開を図るために、令和5年度の「女性部リーダー・事務局研修会」において、各支部の活動報告会を実施した。これは、コロナ禍で活動を中止または縮小せざるを得なかったなか、コロナの収束を受けて、あらためて活動を再開させるにあたり、他の支部の活動内容、特にコロナ禍の過ごし方を共有することから始めよう、という各支部役員からの提案を受けて企画されたものである。

活動報告会では、取り組みの経緯やポイント、成果などを整理した、写真多用のわかりやすいレジュメを各支部で準備し、それぞれの代表者が熱のこもった発表を行った。筆者は同報告会に同席させていただいたが、会が進むにつれ、女性

部員の皆さんの顔が生き活きと変化していくのを肌で感じた。同じ女性部内でも、お隣の支部活動については、知っているようで実は知らないのが実情だと参加者の女性は話していた。報告会では、それぞれの支部でコロナ禍を乗り越える工夫をこらしていたこと、一見すると小さな活動に見えるが、実は奥が深く意味ある活動であることなどが共有された。



『ちゃぐりん』寄贈が生んだ縁が、バケツ稲による食農教育に発展した高部支部

報告会の終了後には「あの活動なら自分たちにもできるのでは?」「アイデアを活かすことができそう!」といった意見が飛び交い、お互いにより刺激となったように見受けられた。発表に向けて自らの支部活動を俯瞰したり、他の支部の部員から褒められたりすることにより、女性部活動のよいところや意義を再認識し、自信を得る機会にもなっていたようだ。

高部支部は、子ども雑誌『ちゃぐりん』を小学校へ寄贈するだけでなく、図書室に「ちゃぐりんコーナー」を設置し、児童や教師に感想を書いてもらう活動について発表してくれた。報告会后には、子どもたちから寄せられた感想文を支店ロビーに掲示するなど、早速変化がみられたという。また、田んぼ地域であることを活かし、今年度は新たに小学生らとともに「バケツ稲」を育てるなど、食農教育にも取り組み始めたということだ。

5 事務局は「きっかけづくり」に徹する

同JA女性部において、このように活動が活発化している背景には、本部事務局・支部事務局の「ほどよい距離の支援」が大きく作用している。営農経済部営農企画課の望月彩友美さんは、今年度から新たに本部事務局に着任した。まだ1年目であるが、「前に出すぎず、きっかけをつくること」を徹底しているという。「女性部は高齢化が進み、自ら率先して新しいことをやろうという機運にはなりづらいのが現状です。でも事務局が口火をきり、入口をつくってあげれば、そこからはどんどん話が進むノリの良さを持ち合わせているのも女性部です。全体活動と支部活動をバランスよく組み立てながら、部員の自主性を後押ししていきたいです」と話す。前述の報告会は、支部長らの提案から本部活動として実現したものであり、本部活動が支部活動を活性化させるきっかけになっているといえる。

また、袖師支部で事務局を務める平田まさみさんは、「会議ではなく気軽におしゃべりできるお茶会を企画したところ、部員全員が参加し、『今までのやり方

ではなくて次はこうしてみたい』とか『ここをこう変えれば活動に参加しやすくなるよね』といった本音がどんどん出たんです。意見が言いやすい環境づくりも必要だと思っています。部員の背中を押しながら、支部活動を盛り上げていきたいです」と話す。

J Aしみずでは、かつて解散したフレッシュミズグループが令和4年に再結成された。新たなメンバーを迎えながら、さらなる女性たちの活躍が続くことが期待される。

(2024年8月取材)



令和4年に再結成したフレッシュミズ。自由度を高くし、無理のない範囲で活動できる持続可能な組織づくりを心がけている(『家の光』2024年9月号で活動の様子が紹介された)